



束芋「公衆便女」
2006 映像インスタレーション 撮影：米倉裕貴 原美術館展示風景
©Tabaimo / Courtesy of Gallery Koyanagi

@Kyoto

仮想センス

私 たちはさまざまな規制のある「現実」とどんな理想も描ける「仮想」との間でもがいている」という茂木健一郎さんのお話を聞いた。「現代美術は自由だ」と語る茂木さんは自由であること

の苦しみもまたご存知で、横浜美術館で行なわれた2時間に及ぶ内容たっぷりの講義に、私もたっぷり励まされた。

現在、「現実」と「仮想」の間でもがき苦しんでいる人が私の周りにもたくさんいる。あるべき理想型を思い描き、それに到達すべく現実世界で頑張る。ときにはその理想型を変更したり諦めたりしながら、みんな折り合いを付けている。しかし、理想型にはほど遠い場所にいるのに、信念を曲げたり

諦めたりすることに大きな抵抗を感じている人に、精神的な問題を生じさせる人が多いように思う。現在の日本もそういった人たちの状態に近いのではないだろうか。

私は制作活動を始めて以来、作品の形態がインスタレーションというややこしい形をしているため、設置するための旅をたくさんさせてもらった。作品は日本人である私を作ったもので、西洋美術の歴史を知らない私にとって、西洋の歴史の文脈で語られることの多い現代美術の世界には違和感がある。歴史を踏襲することはとても重要だという人も多いが、私は今ここに私の感覚に歴史の踏襲が必ずなされると怠惰に考えており、歴史をテキストで追う行為はほとんどしていない。

そこで問題は、私自身のこの体感を感じていることに西洋の歴史が踏襲されているのかということだ。そういう勉強をしていない私には知るよしもないが、いつも海外で展示する際に感じる違和感から、

「きつと違うな……」という思いがある。とにかくそう感じたときは、なるべく丁寧にご自分の表現に至った経緯を説明することに努める。私の理想型は「西洋の文脈で私の作品がきちんと語られること」ではなく、「西洋的な評価を捨てたとしても一つの表現として自分の力で立っていられること」だ。そういった個が増えることで基軸が複数になることだってあるかもしれない。

「仮想」を描くにもセンスがいる。そのセンスが現実世界での態度に大きく影響を与えるし、結果を導くためのプロセスを美しく描ける力になる。

もちろん美術の世界だけの話ではない。日本は「仮想」の描き方によって、とても重要な場所に立っていられる国だと思う。現在、病気になるにつつある日本は、「西洋の文脈で日本が評価を得ること」ではなく、「西洋的な評価を捨てたとしても自分の力で立っていられること」を「仮想」してほしい。☺